

甲状腺に発生した血管内皮腫の1例

昭和41年7月19日 受付

信州大学医学部丸田外科教室
本 間 勇 卿

A Case of Hemangioendothelioma of the Thyroid Gland

Toshikimi Honma

Prof. Maruta's Surgical Clinic, Shinshu University

血管内皮腫は稀な疾患であるが、著者は甲状腺に発生した血管内皮腫の1例を経験したので、その症例を報告すると共に、本症に関する若干の文献的考察を行った。

症 例

石〇み〇り、25才、主婦

家族歴、既往歴ともに特記すべきことはない。

現病歴：1960年3月中旬より前頸部の腫脹を他人より指摘されていたが、何ら自覚症状もないので放置していた。同年6月中旬某病院外科を訪れ、甲状腺疾患として甲状腺末の投与をうけたが、前頸部の腫脹に変化がないので手術の目的をもつて1960年7月12日丸田外科を訪れた。

現症：左側甲状腺の下極に小鳩卵大の結節があり、その表面は平滑、弾性硬で可動性がある。全身状態は良好で、嗄声、疼痛、頸部の血管怒張、膊動、甲状腺中毒症状等は認められないが、左側肩甲部の緊張感を訴えている。心肺、腹部にも異常所見はない。

検査所見：血液、尿、糞便等に異常所見はない。血圧 120~76mmHg、血沈値は1時間値10mm、PBI 値は6.8r/dlでいずれも正常である。

以上の所見から単純性結節性甲状腺腫の診断のもとに、1960年7月14日手術を施行した。

手術所見：甲状腺腫は小鳩卵大で数個が結節様、塊状になり左葉全体を占めている。この甲状腺腫は周囲と癒着なく、又その表面の血管には怒張もなく、容易に剔出し得た。

手術診断は単純性甲状腺腫（塊状甲状腺腫）であつた。

剔出標本の肉眼的所見：大きさは小鳩卵大で、表面には小豆大の結節様の凹凸があり、弾性軟で暗赤色調を呈している。剖面では一部充実性、一部は囊胞変性におちいつている。

組織学的所見：血管内皮細胞がつよく増殖し、一

部に濾胞構造をうかがわせる部位が散在し、また出血を伴う所が混在している。この様な所見を示す所に接して萎縮したコロイドに乏しい濾胞が残存している（図1、2）。

術後経過：術後は順調に経過し、10日目に全治退院した。術後5年を経過した現在健康にすごしている。

考 按

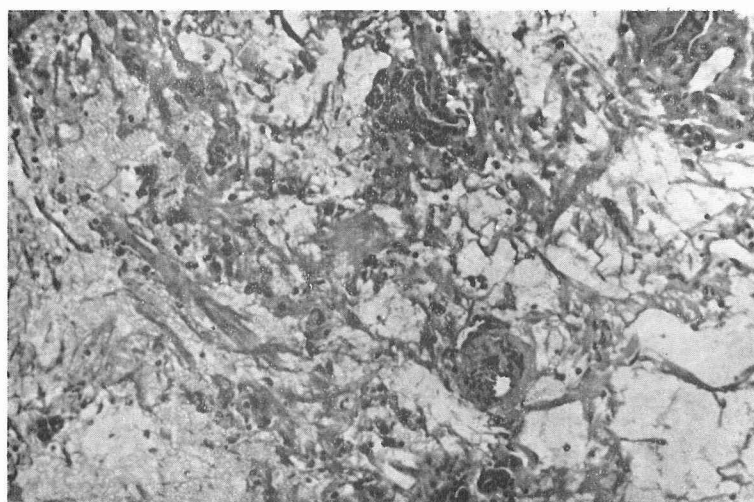
血管内皮腫の概念、性格等については異論が多く、また血管性腫瘍の分類についても諸説があつていまだ統一的な見解はない。Stout^①によれば、血管内皮腫は微細な網状線維を有し、血管内皮細胞が異型の増殖態度を示し、且つ、これが互に吻合を営む傾向を有していて組織発生学的には肉腫の一種に属すべきであるとしている。しかし、Landig^②は悪性血管性腫瘍の1群として臨床的には悪性像の低い血管肉腫のあることを報告している。また、Anderson^③は血管内皮腫について、しばしば術語解釈の混乱があることを指摘し、一般には血管内皮細胞の増殖による悪性の血管腫を血管内皮腫と呼称するが、ある種の血管腫との間には判然と一線を劃し得ないものがあると述べている。Aschoffの著書の中でBorst^④も臨床的には比較的良性である反面再発を繰り返したり、浸潤性の発育或は転移を生ずる場合など悪性の範疇に入るものもあると述べている。

血管内皮腫の発生部位については、Borstは皮膚、甲状腺、肝、脾、腎、副腎、睪丸、卵巢、子宮、骨髓等に発生すると述べている。本邦においては、顔面^⑤、頭部^⑥、胸壁^{⑦⑧}、舌^⑨、下顎部^⑩、四肢^⑪等に発生した血管内皮腫の報告があるが、甲状腺に発生した例は見当らない。三上^⑥の本邦における集計では、血管内皮腫は20才以下には少なく、72例中58例(80.5%)が21才以上の青壮年であるという。また本症の予後については、72例中55例(76.3%)が治癒、8例が転移、2例に再発をみとめたと報告している。

図 1

H. E. $\times 200$

図 2

H. E. $\times 200$

田代^⑩は2カ月の女児の右下顎部、右膝関節部に発生した血管内皮腫で、抗腫瘍剤、放射線療法をこころみしたが、6カ月後に死亡した症例を報告している。

病理組織学的所見については、種々の見解があり、あるものは肉腫様、あるものは癌腫様構造を示すが、またそのいずれにも属さないものがあるとされている。Stout, Anderson らは悪性血管腫瘍の組織像は多様性であるので、その組織学的診断の困難なことを認めており、従つて本症の予後についても種々の見解

が出て来るものと解される。

著者の症例は、単純性結節性甲状腺腫として手術を行つたものであるが、組織学的検査の結果、初めて血管内皮腫と判明したものであつて、術後5年を経過した今日再発の兆もなく健康にすごしている。

結 語

著者は丸田外科教室において、甲状腺に発生した血管内皮腫の1例を経験したので本症に関する若干の文

献的考察を加えて報告した。

文 献

- ① Stout, A. P.: Ann. Surg., 118: 445, 1944
- ② Landig, B. H.: AFIP, Washington D. C., F7-101
- ③ Anderson W. A.: Pathology. 547, 1953. St. Louis
- ④ Borst, M.: Aschoff, L., Pathologische Anatomie, BdI. 752, 1921, Jena
- ⑤ 三上 清一・他: 外科の領域, 6: 518, 1958
- ⑥ 薄葉 忠久・他: 東北医誌. 48: 286, 1953

- ⑦ 長谷川十一郎: 東北医誌, 29: 167, 1941
- ⑧ 斎藤 敏・他: 外科 21: 1290, 1959
- ⑨ 堀 平八郎: 東北医誌, 28: 955, 1941
- ⑩ 田代正昭・他: 臨床皮泌, 14: 877, 1960
- ⑪ 原田儀一郎・他: 日皮科誌 72: 178, 1962

ABSTRACT

A case of hemangioendothelioma of the thyroid gland was surgically treated in Prof. Maruta's Surgical Clinic. The patient is 25 years old housewife and she is still healthily alive for 5 years postoperatively.